

## 立杭地区における共同窯を拠点とした新集落の設計

### —窯業集落の登窯の変遷から見るコミュニティの分析を通して—

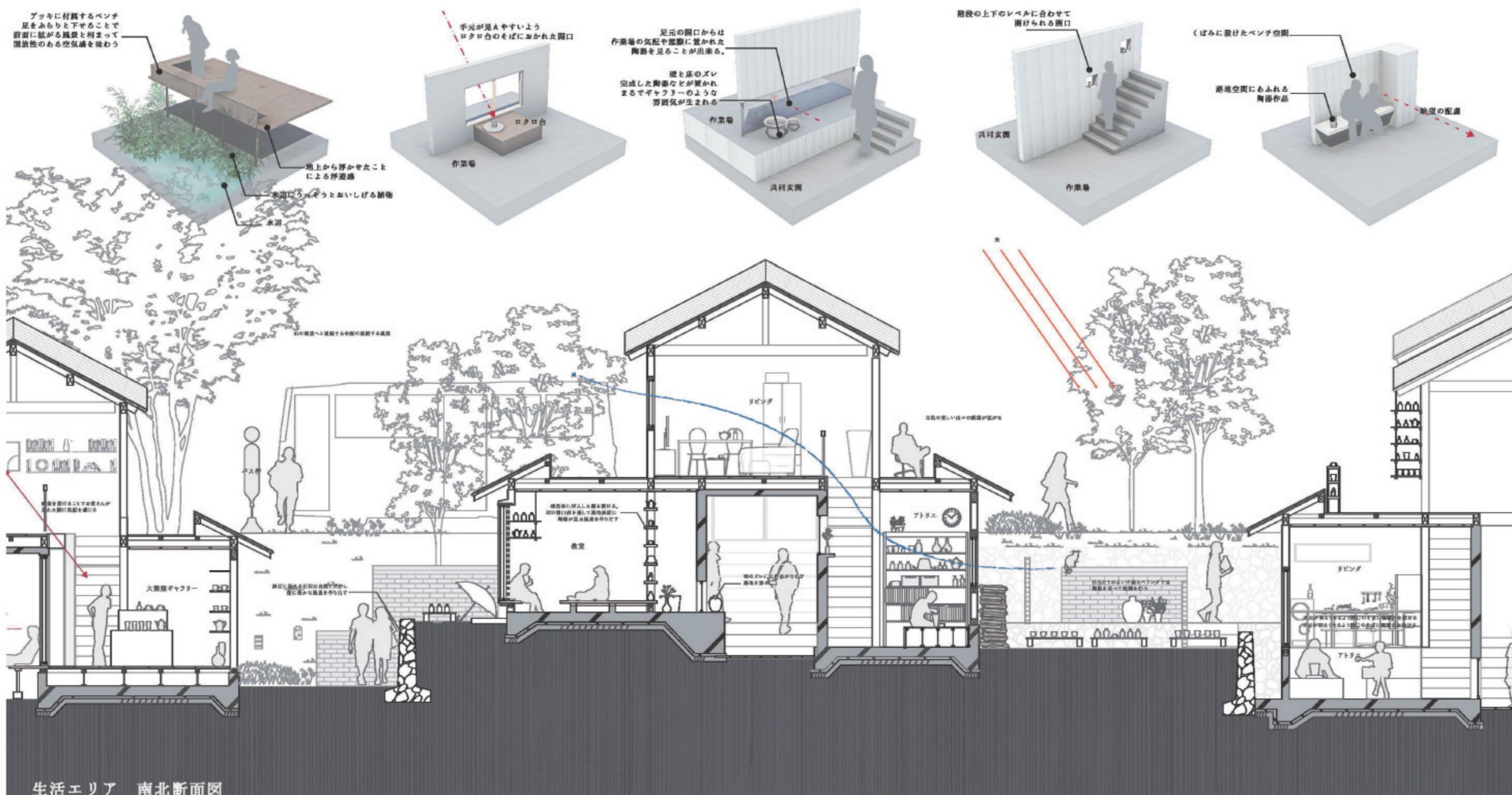
加藤 実悠（遠藤研究室）

日本の生業を基盤とした集落はその土地に応じて地域固有の風景やコミュニティを築いてきた。その様な中で、縮小社会を迎える過疎化が進行する地域の一つで、“共同窯”という独自のコミュニティ文化を持つ窯業集落「立杭地区」に着目した。立杭は現在でも近世以来の人々の生活や生業が現在も続く地域だが、これらの保存活動は遅れており、山裾の開発や窯の損傷、後継者の減少など、景観や人々の生活・生業が大きく変化しつつある。本研究の目的は、共同窯の持つ“共同性”を明らかとし、登窯を拠点に半住人の定住化を促す新集落の設計を行うことで、立杭地区の登窯や伝統技術、自然といった地域資源の保存と活用を目的とする。



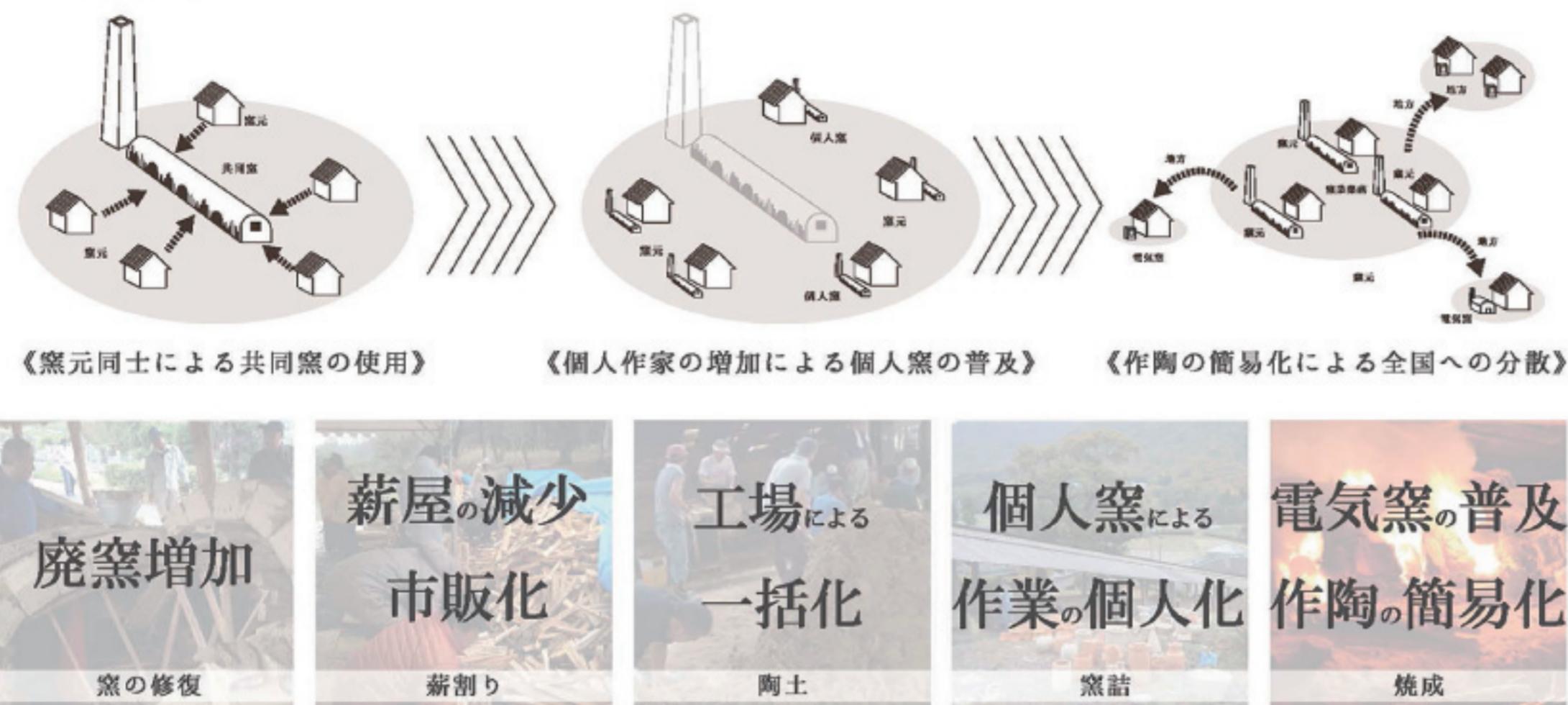
#### □detail

窯業と生活が一体化したランダムスケープやRC造、インテリアといったディテールの考察を行う。共同玄関部分を構成するRCの部分では、自由なプランと開口を可能とし、新集落の住人が作り出す作陶の風景を切り取り、まるでギャラリーのような路地空間を作り出す。また、長板や横木といった窯業ならではの文化をファサードやインテリアと一緒にすることで伝統や文化を継承しながらも、立杭の新たな風景を生み出す。



## □分析 / 共同窯から個人窯への変化に伴う作陶の個人化

窯元同士で共同窯を使用していたころ、住人は土づくりから薪割りや焼成や熱管理まで共同で行っており、集落全体が一つの家族のような強固な絆を持った農村型コミュニティを築いてきた。しかし自己の表現を求めた個人作家の増加により個人窯が増加し、その後、電気窯の普及により作陶の簡易化が進み全国に分散したこと、材料技法といったルールを共有し風土性を失いつつある都市型コミュニティへの変化が見られた。

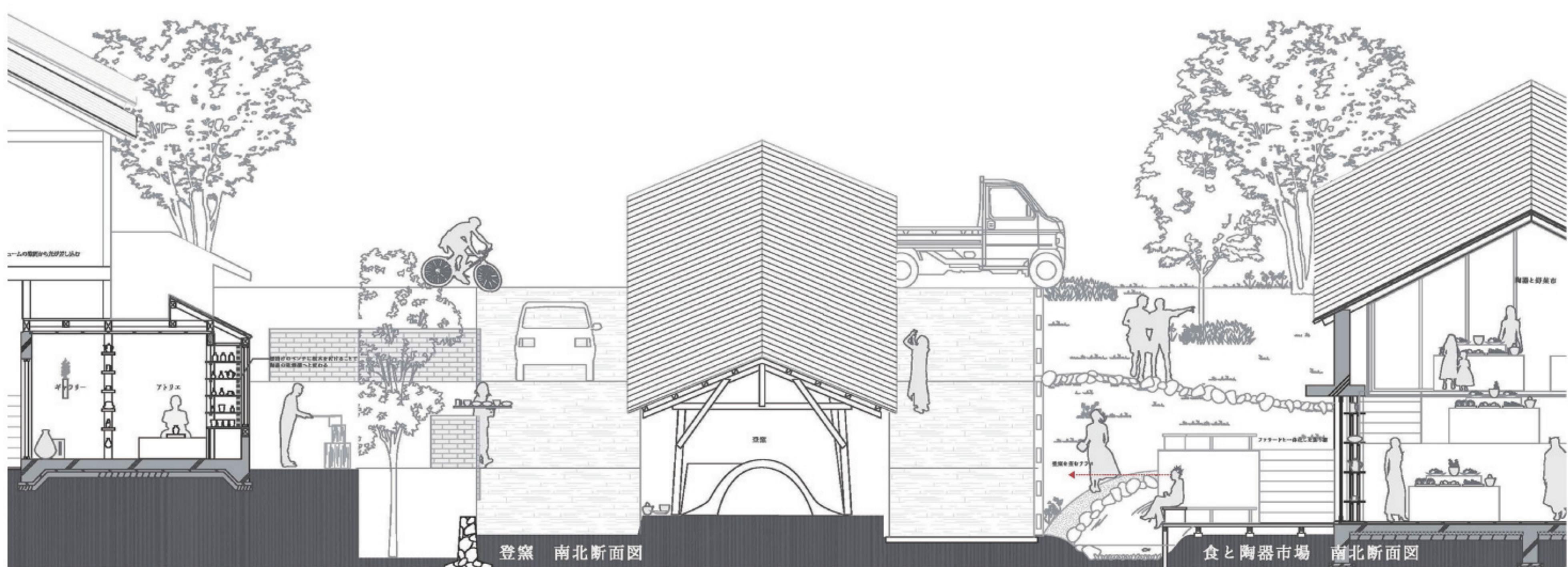
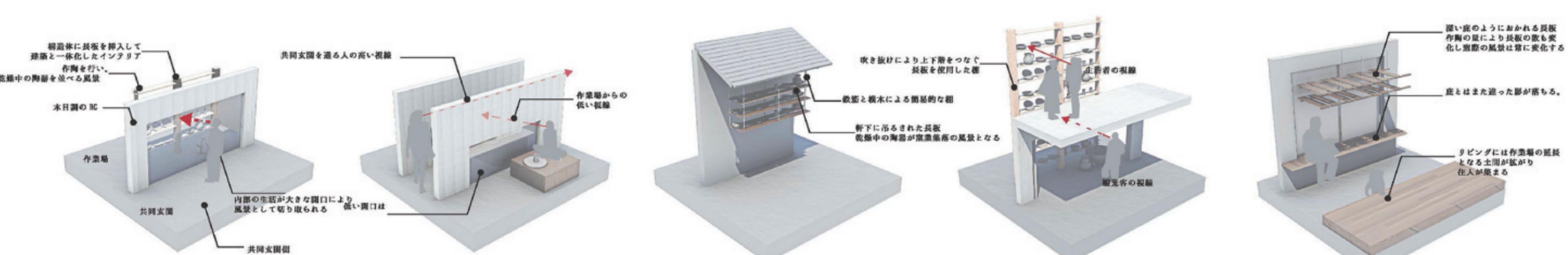


## □設計手法 / 立杭地区を構成する文化的景観の抽出

登録修復活動やビアリングを通して、窯業集落「立杭」を構成する文化的景観の分析を行い、「窯業集落らしさを作り出す建築的要素」と「コミュニティを誘発する空間構成」の二つの抽出を行って、立杭を形成する文化的景観の保存と継承を考える上で基本となる景観の特性を明らかとし、景観の美しさを後世に伝えることが可能と考える。これらを新集落の設計手法に落とし込むことで、集落に根付いたコミュニティを新集落に継承し、移住者が自然と集落のコミュニティに馴染んでいくような関係性を築いていく。

窯業集落らしさを作り出す建築的要素			
中間領域	路地や前庭の地形	住宅や作業場の建築	窯業
斜面地や急傾斜地など、窯業生産者と生活者のスキマ	狭い路地や前庭など、窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ
窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ
窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ	窯業生産者と生活者のスキマ

コミュニティを誘発する空間構成					
奥行きや拡がり、方向性が生まれ意識が流動する空間構成は住人の出会いや会話等を生み出し、農村型コミュニティを作り出す。					
現在の集落構造	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続
新集落構造の提案	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続	窓やドア、壁などの開口部による視覚的な接続

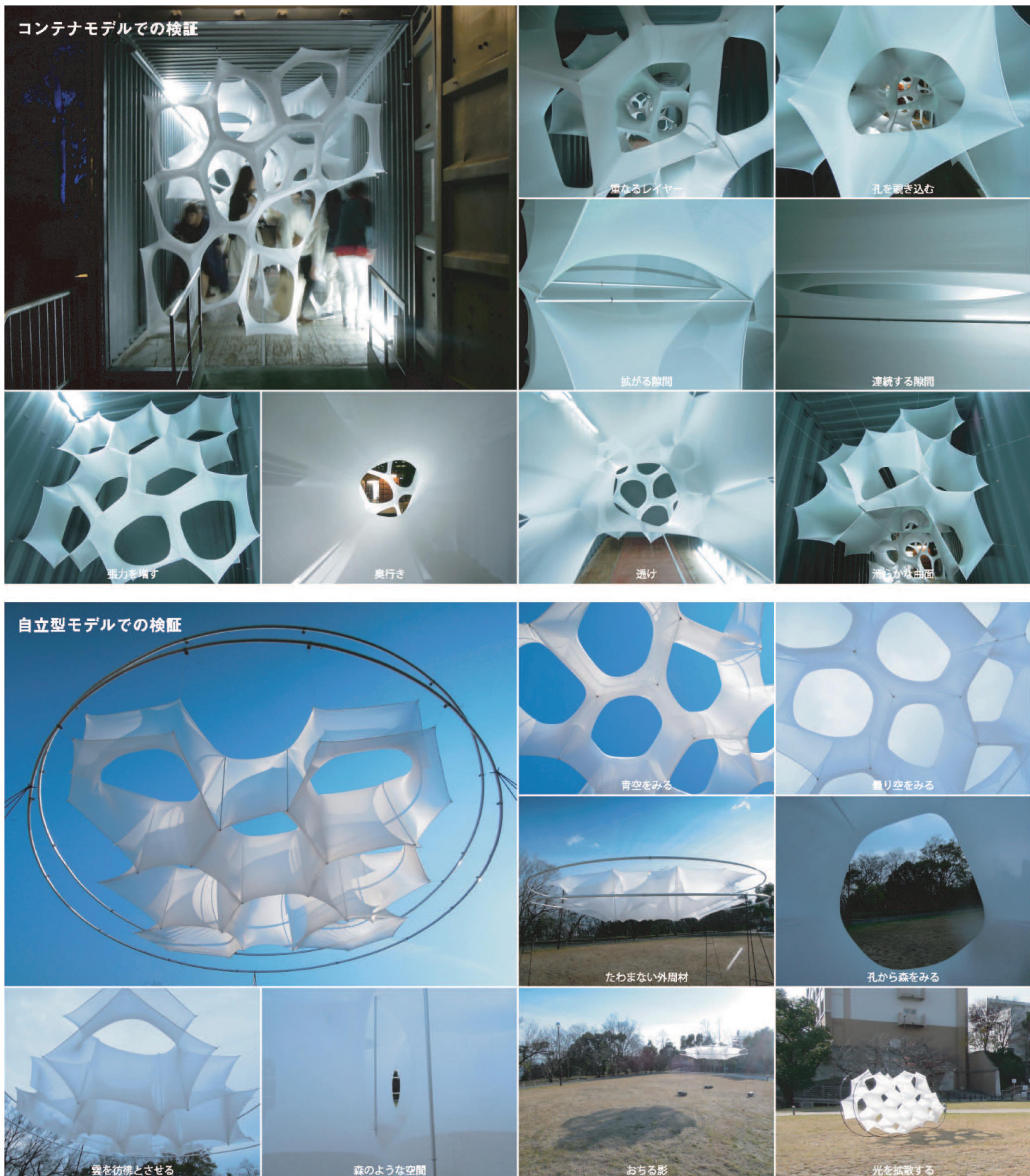


## 伸縮膜を用いたトポロジー構造体による建築空間の設計 —インスタレーション作品制作における実物大モデルの挙動と効果の検証を通して—

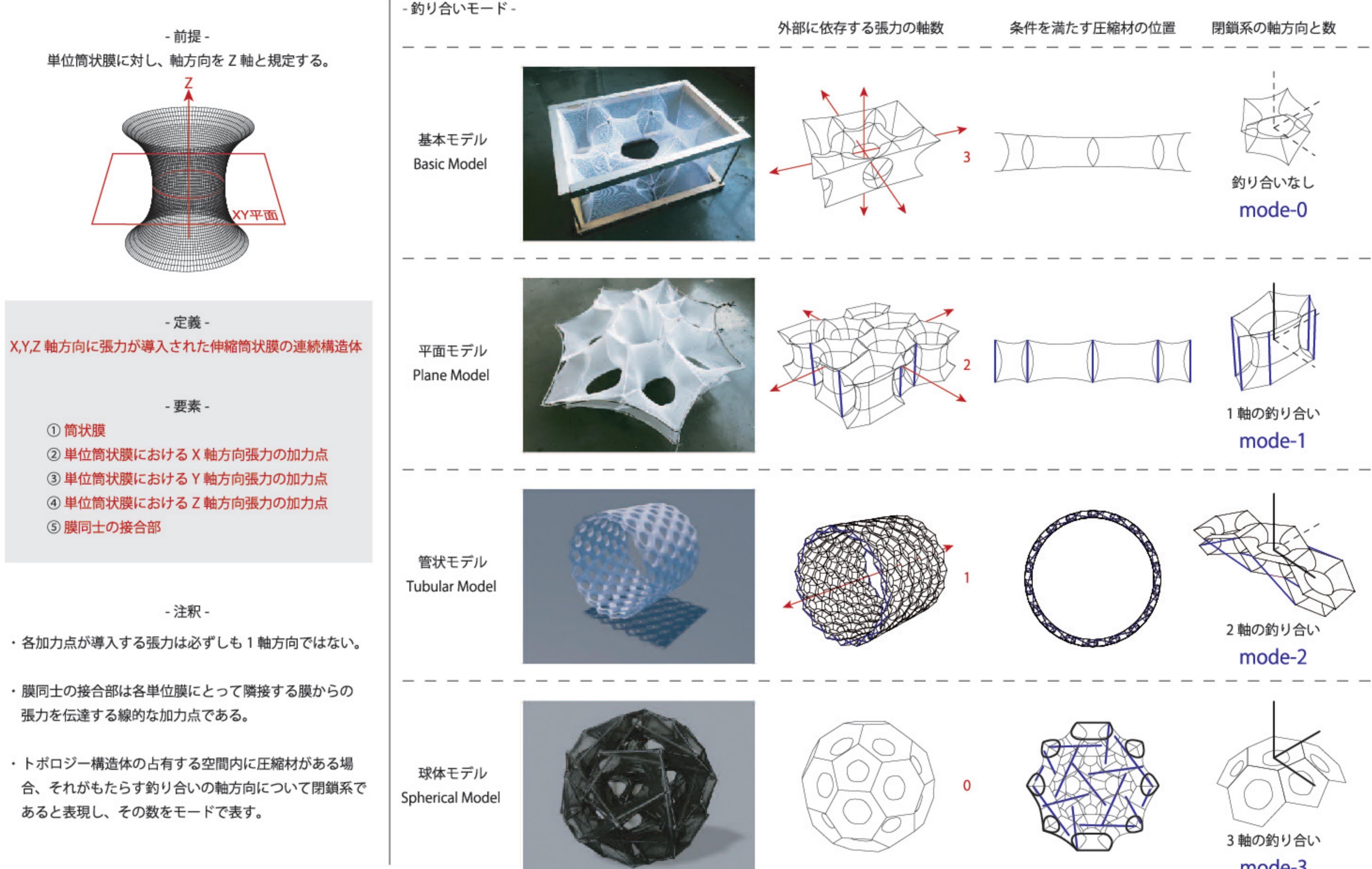
楠目晃大（楓橋研究室）

トポロジー構造体とは張力が導入された伸縮筒状膜、またはその連続体である。実物大モデルの制作を通じた検証および新たな構造モデルの解釈を交えることでトポロジー構造体を普遍的な言葉で定義し、その構成要素を集約、そして体系化する。さらにトポロジー構造体の有する特異性を「閉鎖系と開放系の二種類の釣り合い」という観点から説明し、その釣り合い状態による分類（閉鎖モード）でトポロジー構造体の本質に迫る。

以上の知見と空間の実体験を手掛かりに、トポロジー構造体の持つ可能性を新たな建築空間に展開する。



## トポロジー構造体の体系化



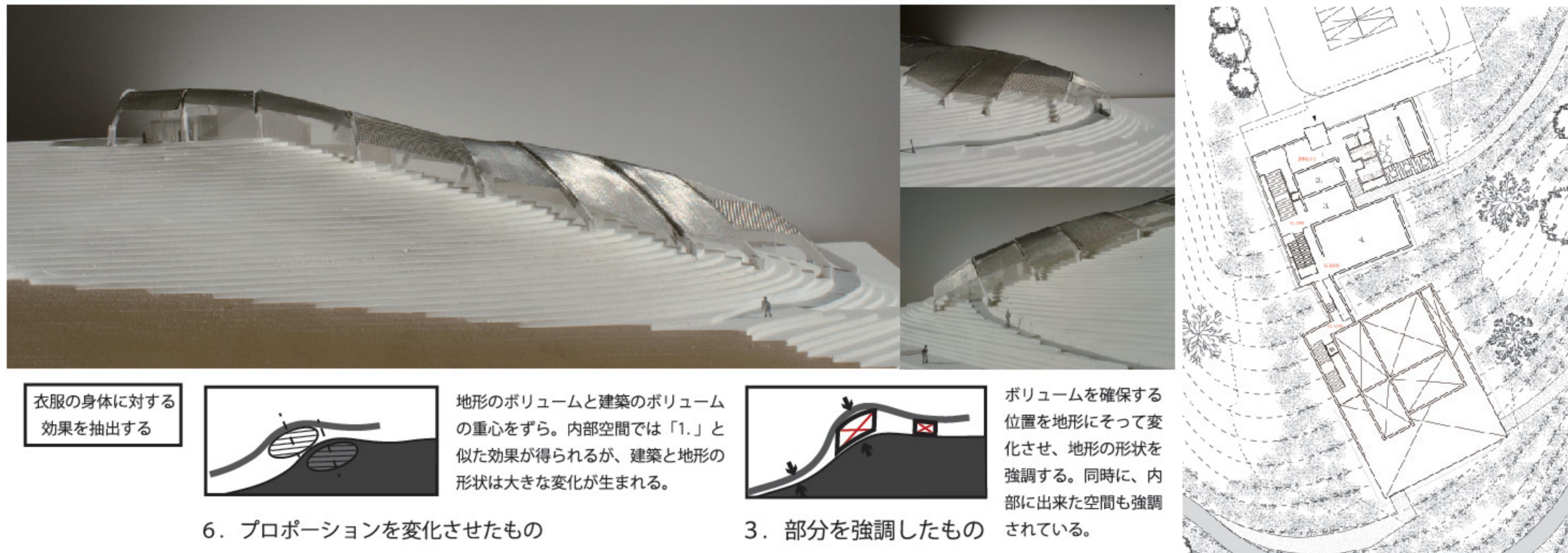
## 建築空間への展開



## 衣服と身体の構成に着目した建築の設計 - 自然地形の特性を引き出す空間の研究を通して - 竹内一貴（楓橋研究室）

衣服は、身体という個別の決まったボリュームに対して、新たに境界を設けることによって、元々の身体を引き立たせる効果がある。建築においても、地形やプログラムという個別の条件に対して、どのような建物の表層の形を持つかという問題において、元々の地形を変化させながらも、

新たな魅力的な地形の一部としての建築が存在できると考え、建築が地形の一部となり、一緒になってその場所の自然地形の魅力を引き出す空間の研究の手掛かりとして、衣服と身体の構成に着目し、建築の屋根の形態から全体の計画を考える提案を行った



## 古空き家群を活用した「まち泊」街区の設計 - 富山県氷見市中心市街地の調査・研究を通して - 大野晴臣（楓橋研究室）

年々増加し社会的関心も高まっている空き家問題について、不動産価値を生み出すエリアデザインを行うことによって点在する空き家群を一体活用する、未完結で広がりのある面的なリノベーション案を提案し、観光まちづくりの観点から富山県氷見市中心市街地において「まち泊街区」

の設計を行う。街並みの変遷の研究から「保存」ではなく、「継承」するデザインコードを用い、設計することによって新たな風景を生み出しながら観光客と住民との生活交流を促し、空洞化している地方都市に観光客のアクティビティを呼び込むことで賑わいを取り戻すことを目指す。



## 統廃合による地域構造の変化に対応した小中学校跡施設の設計 - 気仙沼大島架橋後の社会変化の検討を通して - 小林達矢（楓橋研究室）

日本全国で増加している統廃合は過疎化や若年層の流出等の理由によって今後も増加していく見込みである。学校は地域の最も環境の良い場所につくられており、学校を中心としていた街から学校が無くなることで街の構造が大きく変化する。本研究では、その変化に対応した学校

跡施設を気仙沼大島架橋後の社会変化を検討し、踏まえたうえで島民、観光客、多くの人々が訪れる地域活性化を担うストック活用を目指し、ランドスケープと共に提案すること目的とする。

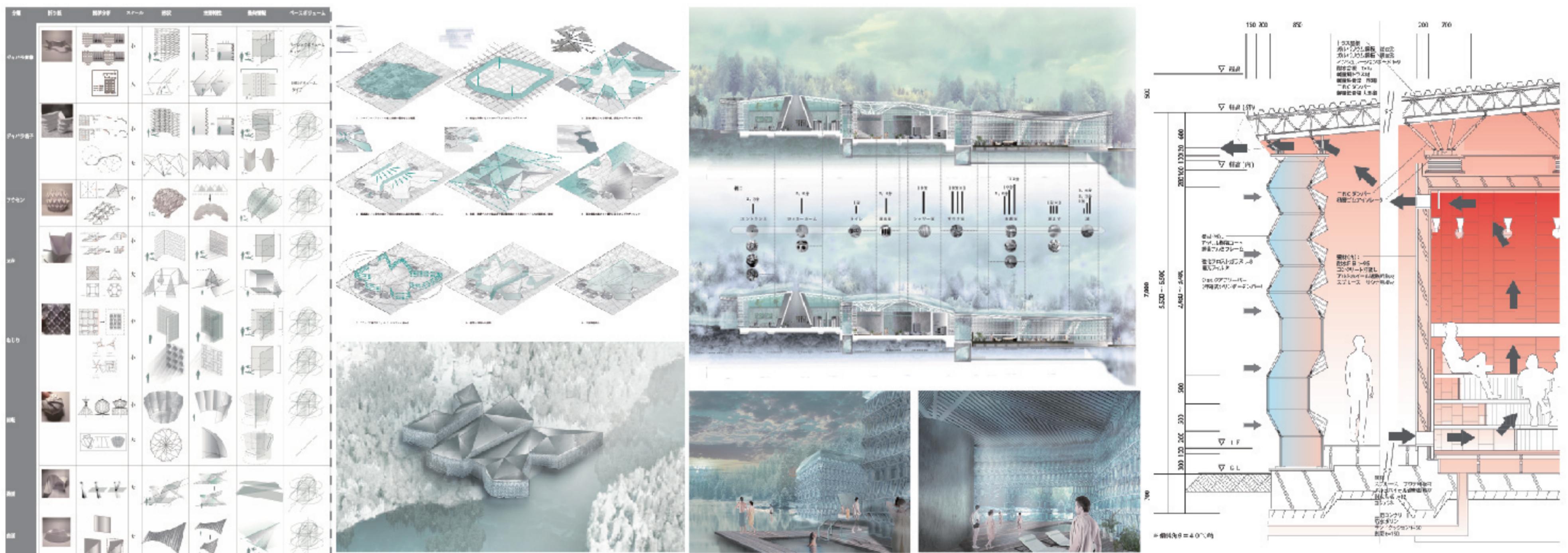


## 幾何学折り紙の建築的応用による空間モデルの提案

小林璃央（遠藤研究室）

幾何学折り紙のもつ可展開性と規則的な多面が織りなすデザインを利用し、自然環境をゆるやかに建物内部にとりこむ機構を提案する。幾何学折り紙にみる空間性をもとに再分類と幾何情報の抽出を行い、敷地情報と重ね合わせることで汎用性のある設計手法とした。その後、フィンランド

タンペレ市において積雪荷重により伸縮する壁をもつ公共スパの設計を行った。サウナと湖を行き来する半屋外空間では、季節や時間によってさまざまに変化する日射や自然を感じることが出来る。積雪による天井高は1m前後、可変壁のガラスパネルの傾斜角は15°が最大変化となる。

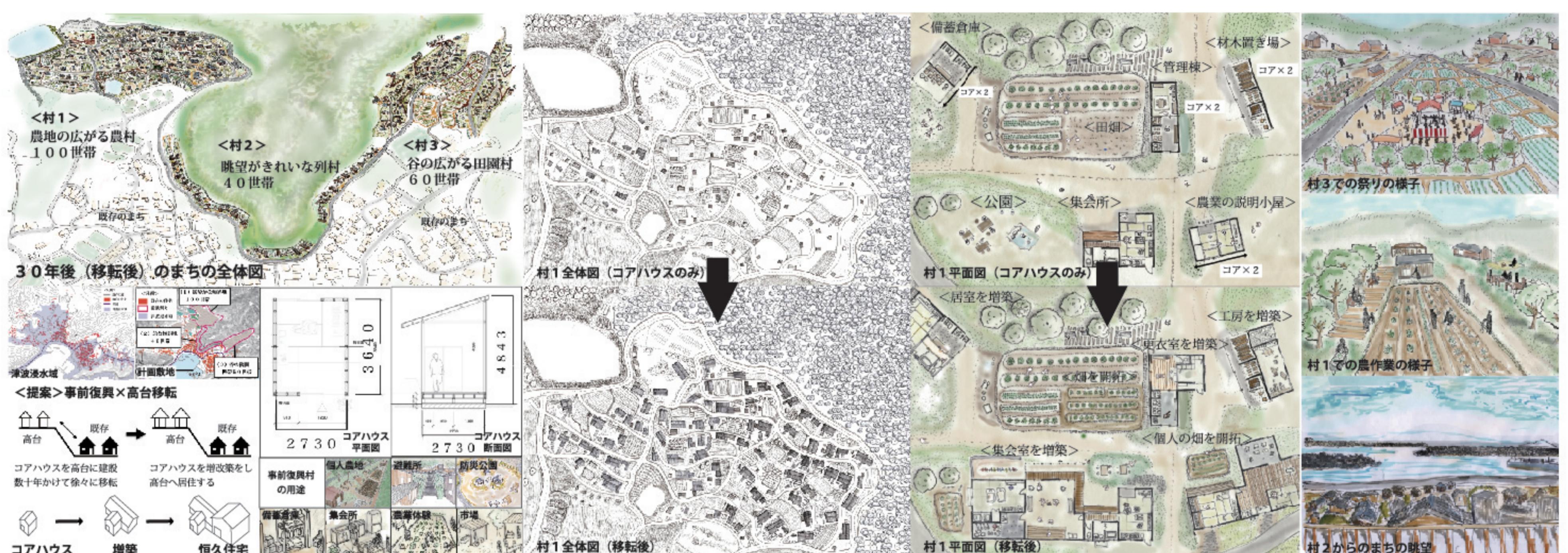


## コアハウス方式を活用した事前復興村の設計 - 和歌山県日高郡の漁村地区を対象として -

高山幸司（楳橋研究室）

南海トラフ地震による甚大な、津波被害が危惧されている。東日本大震災後の住宅復興においては、故郷から離れた高台に居住することを余儀なくされ、またコミュニティ分散されるなどの課題が存在する。本設計では事前復興の高台移転を提案する。敷地は和歌山県三尾地区。この

まちの近くの高台に、災害前から、安価で建設が容易なコアハウスが基となった村を提案する。住民は二拠点居住をし、徐々にコアハウスを増改築しながら居住地を造り、30年計画で移転する。安価で、またコミュニティは維持され、風景が創造されていく、安全な高台移転を可能とする。

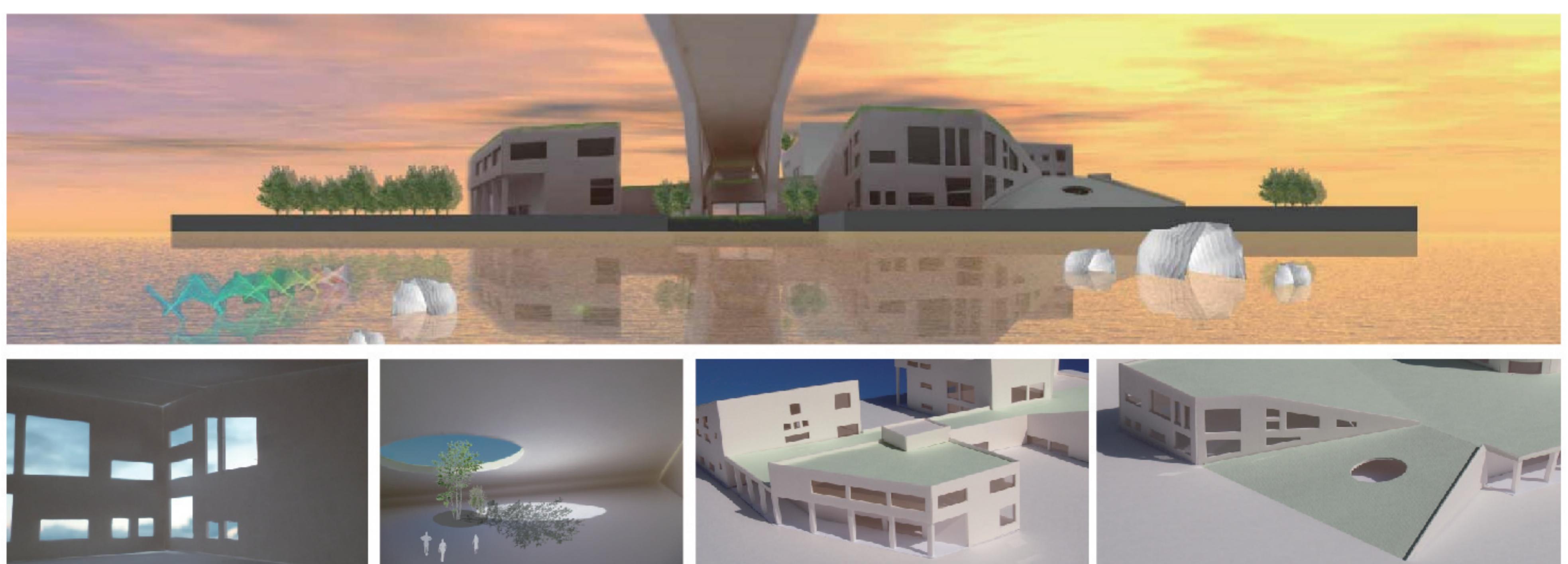


## 場所のポテンシャルを構築する公共空間の設計 - サイトスペシフィックアートの分析を通して -

竹内澄人（遠藤研究室）

特定の敷地に存在するため制作された美術作品であるサイトスペシフィックアートを手がかりに公共空間の設計を行った。無機質な印象を受けるポートアイランド北公園において、土地のポテンシャルを引き出す公園の緑化リノベーションと、これまでにない要素を創出するアートセン

ター、二つの計画によってイベントの時だけでなく、日常的に賑わいを見せる場を構築する。サイトスペシフィックアートの分析を通して抽出された要素は、空間構成に直接的に用いられているだけでなく、計画理念などのソフト面においても用いられている。



## 現代における物質的建築の設計 ー建築の表情概念とフランク・ロイド・ライト設計、ヨドコウ迎賓館を通してー 中川寛之（遠藤研究室）

現代社会には抽象的な建築がありふれている。そのような建築そのものの存在をなるべく消すような建築は「非物質化」と言えるのではないだろうか。本研究においてその対照的な「建築そのもの」を考慮し設計した建築を「物質的建築」と定義し考察した。

ソフト面において現代社会の装飾の再解釈を行い、ハード面においてはヨドコウ迎賓館の構成手法の分析を行った。その両面から設計手法を導き出し、モデルケースとして六甲八幡神社の南に、人に馴染みやすい図書空間の設計を行った。



## 近未来の日本における小児ホスピスの設計 - 英国小児ホスピスの在り方と日本的小児病棟 の空間分析を通して - 中村未明（遠藤研究室）

日本における小児ホスピスの提案を行った。医学の進歩により命が救われる子どもが増加する一方で、重い障がいが残るケースや、退院後も医療依存度の高い子どもたちの数は増加していくと考えられる。日本では、小児ホスピスへの理解や普及が遅れており、国内には数えるほど

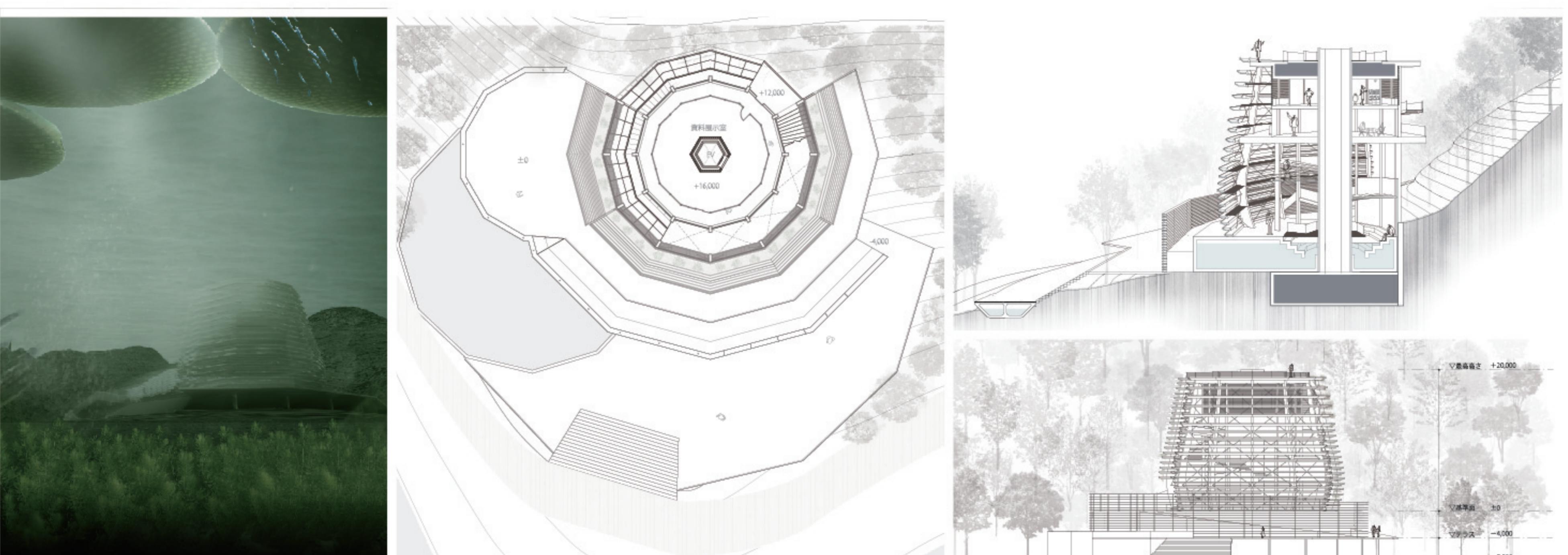
しかない。そこで、小児ホスピスの先進国である英国の運営状況や建築的特徴や、日本の療養・生活・発達を目的とした環境づくりを研究し、子どもとその家族へのターミナルケアとレスパイトケアを目的とした小児ホスピスを計画した。



## 生態系サービスとしての環境コミット型建築の設計 - 布引五本末ダムの長寿命化計画をケーススタディとして - 花岡航（楓橋研究室）

建築はそのスケールの大きさから周辺環境に大きな影響を与えるため、環境という側面からも大きな社会的責任を負っているため建築提案に於いても省エネルギー型や、長寿命型など様々な形式で環境配慮型の建築が提案されている。本研究で提案する環境コミット型建築は生態系の環と一

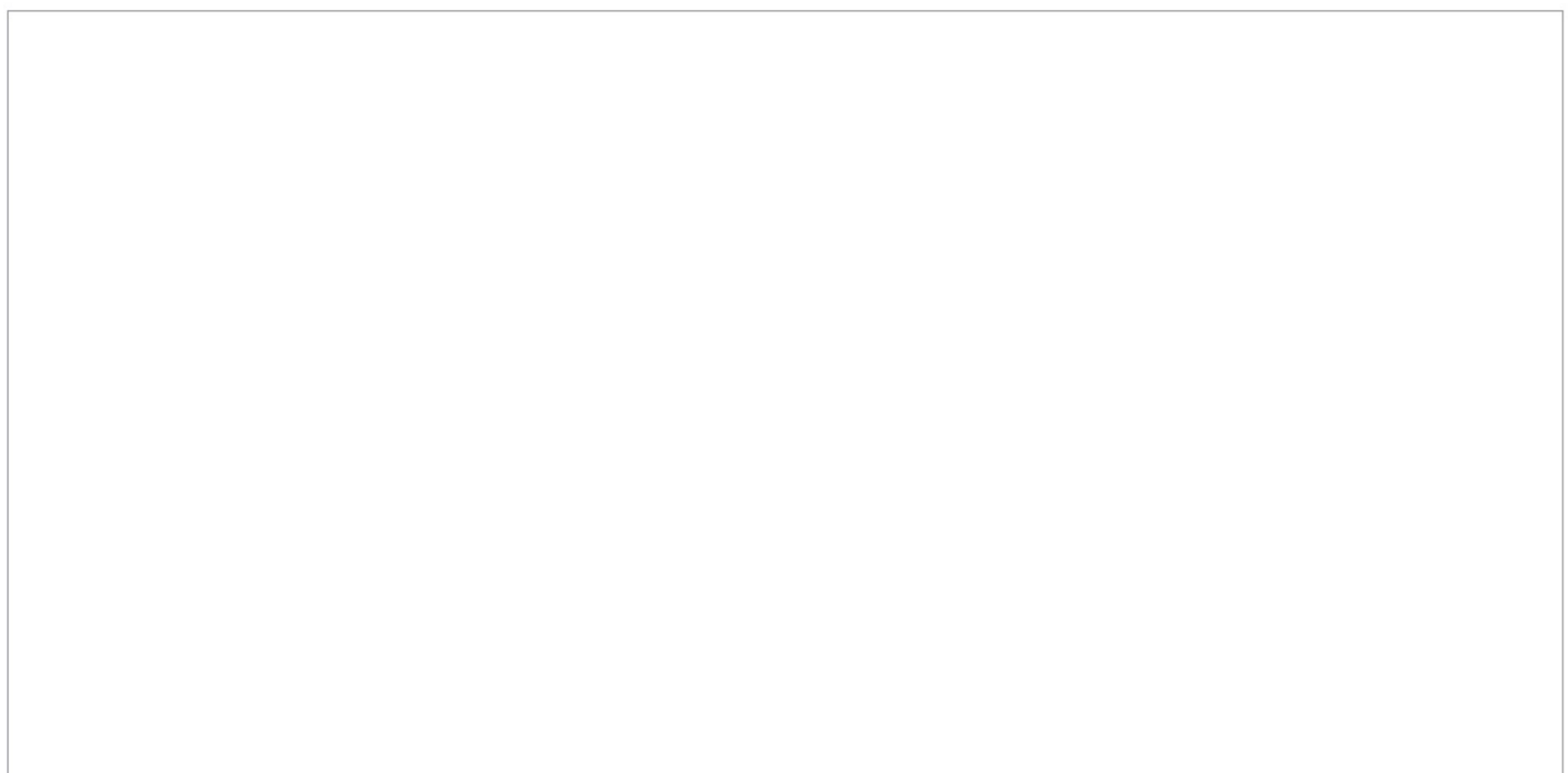
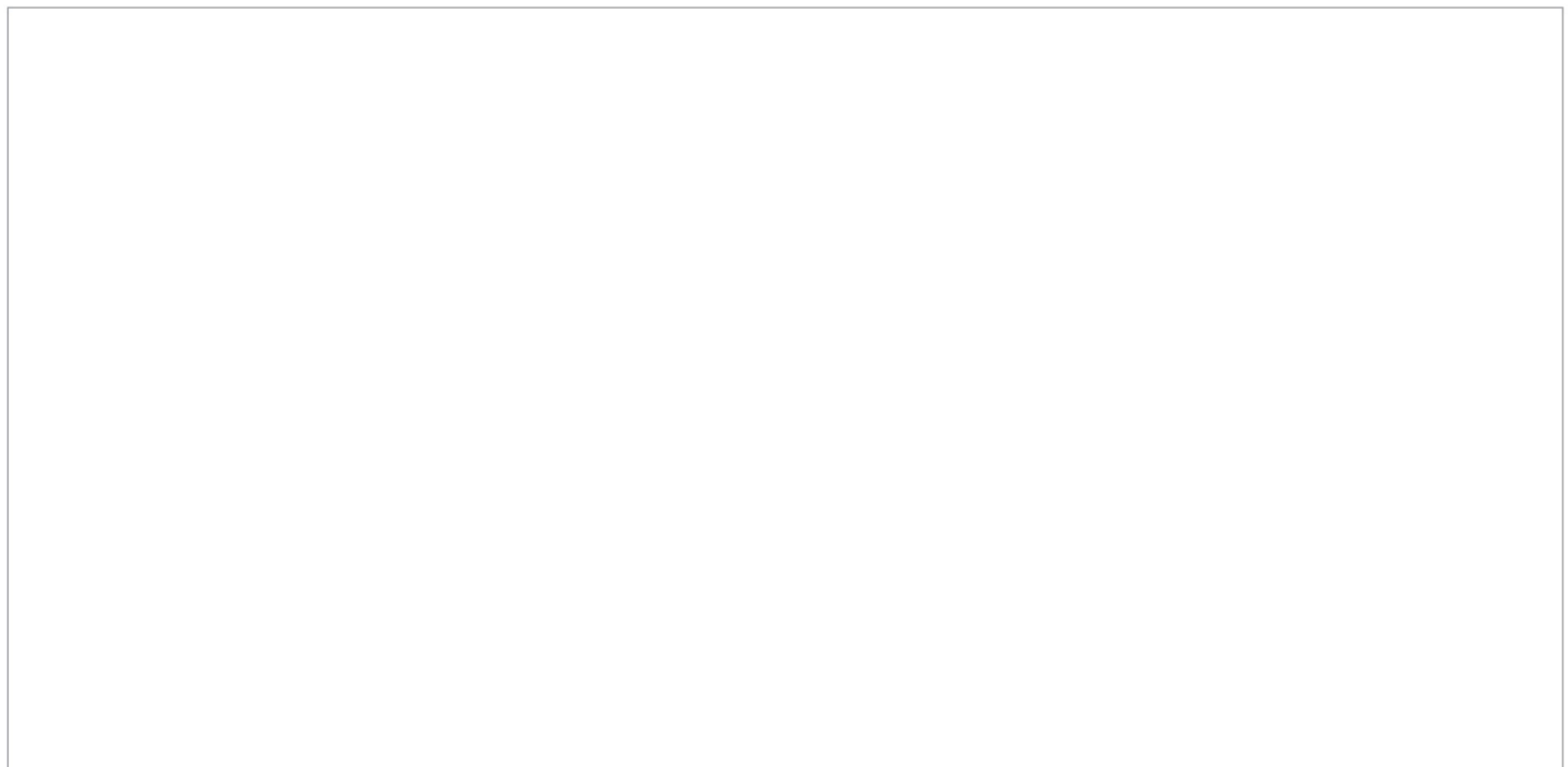
体となり、生態系サービスとして効果を享受する。このように生態系サービスという観点から環境と建築の関係を再考し、建築の提案を行う際の手がかりを示すことを目的とする。



## 都市の核としての卸売市場の設計 - 卸売市場の動線・空間的特性に関する研究を通して - 安田諭史（遠藤研究室）

現代の日本において、経済性や流通の合理性に偏重し、都市から切り離された建築は周囲から孤立し、場所性に欠いたものとなっている。この現象が顕著に現われている「卸売市場」の構造を再編する手法を明らかにするため研究を行った。流通空間における構造特性と空間的特性を

生んでいる建築的要素の2点に着目することで、周囲に対して閉鎖的及び排他的な性質となっている要因を明らかにし、また卸売市場における建築的要素から成る空間の応用可能性を示すことで、都市において周辺環境と関係性を持つ、開かれた卸売市場の在り方を提示した。



## ネオ・異人町の空間デザイン - 移民時代における外国人に応じたハイブリッド空間に関する研究 -

李厚君（遠藤研究室）

現代の世界には先進諸国から途中国まで少子化と高齢化を深刻していく。日本における、すでに超少子化高齢化時代の危機を向かう。それで労働力不足、経済不況、都心部環境悪化など問題を顕在していくので、移民など人口政策を開拓の可能性を高まる。その背景で近未来の

都市空間と建築はどんなきっかけを向かう、或いはどうなん転換しへべきという課題を考えている。また実の敷地で建築の更新、町並みの改造、都市景観三つの視点から三つの設計或いは構想で未来の都市環境はどんな姿、どう発展することを検討している。



## ハバナと日本の近代建築に対する再生のための設計案—近代建築の保全と修復に関する新たな手法の提案—

劉志超（遠藤研究室）

現代の技術によってこういう特別な視覚機能を持っているガラスは、伝統や近代的文化やコンテクストに関する建築のデザインには、さまざまな試しはされている。視覚的でも、空間的でも、使用者が懐かしい気分を引き出すのは総合的な作り方が必要だ。まだ建築に住んでいる住民や使用者

はこの立て替える過程にも、いろいろ解決案が必要だ。そこで、建築家だけではなく、行政や支援者の努力もかけないのだ。この間にも他の商業的な案が出てきているが、この案は本当に地元の未来に助けられる案の参考になればと思う。



## スキマ建築を導入した新住宅団地の設計 -「住宅小区」における生活課題の研究を通して-

労逸（楓橋研究室）

中国で形成された密度の高い住宅地は、都市の大部分を占めている。その中で、旧住宅団地のほうが広い道路や豊かな緑地を持つが、多くの問題があると考えられる。これらの問題は客観要因のため、すぐに解決できない。だから、うまく改善するように、既存の住宅の間の空き地を

使用し、様々な年齢層の住民の要望によって、スキマ建築というパブリックスペースを設計する方法を考えている。また、中国の一般的な旧住宅団地の中で、このスキマ建築を建てた上で、若者がどんどん増えることも期待できる。

